

編集後記

近ごろは学生たちを教えていて、社会科学を成り立たせている諸概念や思考様式が、彼らからはますます遠いものになりつつあることに、しばしば気づかせられる。こうしたばあい、大学という世界で長く生きてきているわれわれは、詰込み教育や受験競争、あるいはテレビに代表される視覚型のコミュニケーションの影響などをもち出して、その弊害を云々し、慨嘆するだけにとどまりがちである。

しかしふりかえてみると、一般読者や学生向けの出版物はもちろんのこと、専門書や学術論文における用語や文体も、以前とは随分変わってきているようだ。私自身にしても、20年も前に発表された著書や論文を読んでみて、少なからず違和感をもつことがある。現代は、言葉をふくむコミュニケーションの手段の変革期にあるとあってよいのだろうが、それが学問の世界にもおしよせて、術語だけでなく、学問そのものの性格まで変えようとしているのかも知れない。もしそうだとすれば、これは、近代以降のヨーロッパに発達して、わが国に輸入されつづけてきた学問のよって立つ基盤が、根本から問い直されていること意味する。

もちろん、時代をこえた視点から、社会の諸現象を外部的に観察し、批判的に分析し、問題剔出をおこなうことは、学問の最も重要な使命である。しかしわれわれの学問が、最もわれわれに近いところにいるはずの学生たちにも通じなくなり始めているとすれば、この事実にたいして、こうした学生を大量に生み出している社会をただ批判するだけでは、ことが片づかないと考えられるのである。

(Y. H. 記)